















春から夏へ

八二八

寺澤琴風



(日曜木)

大正九年三月三十日

(八)

「黒、黒、お前は俺の心を知つてゐるな。お前は俺の心を知つてゐるんだ。世間の奴等は仕事にかけられてるんだ。世間の奴等は仕事にかけられてるんだ。」

「俺の心を知つてやアしない。そりや神様だつて知つてるかううか解りやしない。けれどお前だけは俺の心を知つてくれてるなア。」

「仙吉は黒の頭をなでながら人間に、自分の親しい友達にでも言ふやうに斯ういひました。」

「夫に人間の言葉の解りさうな苦しきが、仙吉には黒の頭をなでながら人間に、自分の親しい友達にでも言ふやうに斯ういひました。」

りながら販賣になつてゐる。

へなぶり

炎天下に油の汗の塊は附の帳

薄に玉ざさずやく

我利慾に同胞の競争へは潤

度しがたき金額なり

常に目の見へぬ貰も心眼と共に

開けよ競入への口

上院は中立せんそれが中腹に族色

天下下を説取それ難いかな

新平の種まき少く築ですか

兵衛の御座が出て

上院は中立せん

御菓子司

電話ウエスト五三六六

新茶

御菓子

勉強調進

御菓子

村山

松屋

電話ブッシュ街一九〇七

川口

産院

金門貸自動車

新茶

金門貸自動車